





有松は、旧東海道の鳴海と加立の宿の間に、慶長13年(1608)に、各宿として開かれた。尾張藩の奨励により、阿久比村から移住した人達の一人、首田庄九郎により、紋塗のが考案され売り出されると、藩の庇護を受け、紋は有松名産として、全国にその名が知られた。有松は紋と共に繁栄したが、天明4年(1784)、大火が起り全村はほとんどが焼失した。村の復興に当り、建物は従来の葺瓦を瓦葺にし、壁は漆喰塗り、二階の窓は虫籠窓に改め、当時の防火構造で造られた。豪壮な商家が建ち並ぶ現在の町並みは、この時に形成された。商家の建物は、中2階建切妻平入りで、1階の前面についている半間の上庇の下は、昔は紋の店頭販売の為に、大きく開かれていたが、今は格子がついている。名古屋市は、有松を町並み保存地区に指定し、伝統的建築物や、町並み保存に必要な物件を定め、古い町並みに調和した景観の整備に努め、建物の修理・修景工事の補助事業を進めている。

平成7年3月31日 名古屋市教育委員会



小塚家住宅
市指定有形文化財(平成四年)

主屋一棟、表倉一棟
南倉一棟

当住宅は重厚広大な有松の紋間屋の形態をよくとどめている。主屋の一階は格子窓、二階は塗籠壁、隣家との境に卯建があり、塗籠造のうち最も古いものの一つと思われる。有松らしい家並みの景観上からも貴重な建物である。

小塚家は屋号を山形屋として明治まで紋間屋を営んでいた。

名古屋市教育委員会



復元予定地
ありまつ

有松一里塚

一里塚は慶長9年(1604)幕府が主要街道を整備し、江戸・東京・日本橋を起点に、道程一里(約4km)ごとに道の両側に塚を築き、標石を建てたもので、旅人に距離を示しただけでなく、商賈その他の連立組織の基盤にもなりました。

緑区は昭和58年建築にまで、「有松一里塚」は方5間(約10m)の塚で、上り松並木に目だたぬ様子を構えた。鳴海町字逢原4-5番地の両側に完全な形の塚で、1里塚があったが、大正10年払い下げられ民間となり、現在は取り壊されています。

この度、名古屋現状の復元を計画し、その旨を「ありまつ」の復元予定地に示す。



丹下町常夜灯

鳴海宿の西の入口丹下町に建てられた常夜灯である。右に「寛政表に「林業大権現」右に「寛政四年」一左に「新島中一」真には「福主重四」と彫られている。「寛政四年(二七九二)、篤志家の寄進により設置されたものである。旅人の目印や宿場内の人々及び伝馬の馬方衆の安全と火災厄除などを秋葉社に祈願した火防神として大切な存在であった。

半部の常夜灯と共に、鳴海宿の西端と東端の双方に決っているのは、旧宿場町として貴重である。

名古屋市教育委員会

宮宿：

宮宿（みやじゅく、宮の宿、熱田宿）は、東海道五十三次の41番目の宿場。中山道垂井宿にいたる脇街道美濃路や佐屋街道との分岐点でもあった。一般には宮の宿と呼ばれることが多かったが、幕府や尾張藩の公文書では熱田宿と書かれている。

場所は現在の愛知県名古屋市熱田区にあたる。東海道でも最大の宿場であり、天保14年には本陣2軒、脇本陣1軒、旅籠屋は248軒を擁し、家数2924軒、人口10,342人を数えたという。

古くからの熱田神宮の門前町、港町でもあり、尾張藩により名古屋城下、岐阜と並び町奉行の管轄地とされた。

桑名宿とは東海道唯一の海路である七里の渡しで結ばれていた。現在も、折りにふれて桑名～宮間を遊覧船で渡る「現代の七里の渡し」が行われる。また、桑名宿のひとつ先の四日市宿まで直接結ぶ十里の渡しも運行されていた。宮とは、熱田宮すなわち熱田神宮の略で熱田宿ともいう。熱田神社の門前町で、公的な文書では「熱田」とある。

尾張藩では熱田奉行を置いて支配していた。

桑名宿への七里の渡し場、脇街道である佐野路・美濃路への分岐点、さらに62万石城下町名古屋への表玄関として街道随一の規模であった。

なお里程は、東海道桑名宿へは海上7里、佐屋路の岩塚宿へは2里、美濃路の名古屋宿へは1里半であった。

